

病理診断における精度管理の意義と実際 — 今、病理医がなすべきこと —
Quality Control in Diagnostic Pathology

第 101 回日本病理学会 ワークショップ 4 (2012 年 4 月 27 日) 概要

医行為である病理診断において、その業務精度の維持・向上に向けた努力は必須である。日本のあらゆる施設において質の高い病理診断を行うためには、病理技術や診断基準の標準化、およびこれに基づく病理診断部門内外での精度管理が必要不可欠となる。標準化に関しては、診断基準の均てん化を目指した診断講習会などが日本病理学会をはじめ各学会・研究会等で開催されている。一方、現場における標本作製・染色 (H&E 染色、免疫染色、FISH を含む)、診断・報告過程などの内部精度管理は、各施設や個人にゆだねられているのが現状である。また、日本臨床衛生検査技師会などのコントロールサーベイが行われているが、病理医がなすべき外部精度評価は十分に普及していない。

病理医の慢性的不足・過重勤務が唱えられる現状で、質の高い病理診断に向けてなすべきことは何なのか、概念や理想ではなく、具体的事例を紹介しながら病理学会の会員が今なすべき病理診断の精度管理を提言する。

ワークショップ座長

津田 均 (国立がん研究センター中央病院 病理科・臨床検査科)

羽場礼次 (香川大学医学部附属病院 病理部)

ワークショップ演題

1. 日本病理学会における精度管理の役割 (鬼島 宏、弘前大学)
2. 分子病理診断の標準化と精度管理における課題と取り組み (畑中 豊、北海道大学)
3. 乳癌免疫染色に関する精度管理システム確立 (増田しのぶ、日本大学)
4. 大学病院病理部における精度管理の現状と課題 (羽場礼二、香川大学)
5. 一人病理医施設における精度管理の現状と課題 (木佐貫篤、宮崎県立日南病院)